

『琅』二十九号への手紙②

—「魂を込めて伝えるべき」と—

赤松 理

『琅』29号ありがとうございます。長い間の編集のお仕事、お疲れ様でした。私ごときにも、身に余る紹介文を頂戴し恐悅至極です。先生のブログ2015.08.15の書き込みも拝見しました。

「隣国を侵して残酷な加害者となり、また原子爆弾の被爆というこれ以上ない過酷な被害者となった日本民族。それ故にこそ、平和を訴え、戦争に反対する最高の資格を有する。このプライドを持って、とこしえに平和と反戦を訴えていくことが、われわれに与えられた地球的な使命だと言えないだろうか。」

共感します。

私事ですが、この夏、さるマイナーな説書感想文コンクールで「最優秀賞」を頂戴しました。「8時15分ヒロシマに生きぬい

て許す心」という本に限定された感想文コンクールなのですが、お察しの通り、題名の8時15分は1945年8月6日の8時15分です。その本の示すことと、私の思いは上記の引用と通じるものがあります。是非ご覧下さい。

「魂を込めて伝えるべき」と

私は、終戦後14年経った1959年に広島市内で生まれ、己斐で育った。母校は、あの日、市街地から逃げてくる被爆者の救護所となつた己斐小学校である。級友の祖父母や両親の多くは被爆者である。しかし、私の両親は戦後広島に移り住んだ者なので、私の近親者に被爆者はいない。

大学を出て教職に就いた私は、広島に原爆が落とされてから50年目にあたる1995年は横浜の小学校で6年生を受け持っていた。新しい単元づくりの学習材を探していた夏休みのある日、本屋の店先で「絵本で読む広島の原爆」(福音書店)という本に出合った。あるページに行き当たった時、そこに描かれている

のが、母校であることは瞬時にわかった。卒業する年まで建っていた瓦屋根の講堂、特徴的な校庭の構造がすぐに己斐小学校だと気付かせた。しかし、その絵が己斐小学校だとわかると同時に、全身に鳥肌が立った。その絵には自分が通っていたころには考えられないような光景が描かれていたからである。それは、校庭に掘られた7本の溝、奥のほうの溝から立ち込める煙の絵である。小学生当時、校庭に鉄棒を新設する工事を行った際に人骨が出てきた、という話を聞いたことを思い出した。その骨は、救護所となった己斐小学校で、力尽き亡くなった被爆者を焼いたその骨だったということだ。まさにその時の様子を描いた絵だった。

己斐小学校では、80人以上の火葬がおこなわれたそうだ。身元不明のまま引き取り手のなかつた遺骨は校庭の隅に集めて埋め、後に平和公園の供養塔に移されたのだが、拾いきれなかつた遺骨が鉄棒新設のときに出てきたものと思われる。世が世であれば、どの人も丁寧に棺に納められ、一人一人が尊厳を持って火葬されるべきものを、あまりに

も多くの人が一度に死んでしまったのだ。

同じ校庭で繰り広げられた、自分の楽しい小学校生活と、わずか20年あまりの時間差で起こっていたあまりにも悲しい出来事。自分の記憶の1ページと絵本の1ページのギャップが、両肩をつかんで激しく揺さぶるような衝撃を私に与えた。その衝撃を、平和への願いに変えて子どもに伝えるために、単元学習を立ち上げることを決意した。戦争を知らない自分と子どもたちが、どうやってこの悲惨な衝撃的な出来事を知り、理解し、伝えていくのかを模索した。

教材研究の過程で、被爆体験談を聞く会に参加し、土田康さんのお話を聞く機会を得た。

土田さんは小学校教員として白鳥小学校で被爆した。その日の朝、教室の窓から「おはよう」と校庭にいる子たちに声をかけたすぐあとに閃光がはしった。衝撃波の後、何とか校庭に出てみたが子どもたちの姿はなかったという。その土田さんが話のまとめとして「被爆体験談を通して世界に対して発するメッセージはなにか」という司会者の問いに對

して答えた一言は「それは、許すということです」。参会者から「こんな酷い日にあつていながら、なぜ許すことができるのか。アメリカが憎くはないのか」という批判にも近い質問があつた。土田さんは「私が、体験談をみなさんに聞いてもらうのは、二度と核兵器を使うことのない世界にするためです。憎しみの連鎖は戦争を引き起こす。だから、許すこと、許し合うことが必要なのです」と答えた。単元の方向が、この時決まった。私たちが原爆を学ぶのは、二度と核兵器を使うことのない世界を作るためなのだ。悲惨な体験を伝え聞くだけにとどまってはならない。それを乗り越えて生きていくヒロシマの人々の魂

にこそ学ぶべきことがあるのだ。単元を終えた時の児童の感想である「…広島の人には本当の平和を知っているのです。長崎の人は本当に理解しています。原爆を落とされた時に肉親を灰にされた人も、自分の体が不自由になった人たもひたすら生き続けるでしょう。何があっても立ち上がって平和を望んで生きていく人々のたくましさは、うらやましいほどです。わたしも、本当の平和、日先だけで

はない平和を理解できるようになりたい」。20年隔てて出合った「8時15分」には、あの時子ども達と学んだすべてが凝縮されている。原爆の惨状、生き延び生き抜く人々の苦悩、復興への希望、平和への願い。これらが土田さんの「許す」というキーワードでつながっていく。

広島に生まれ育った私は、しかし、美甘草子さんのような被爆二世ではない。級友の祖母の被爆体験を平和学習の「宿題」として聞いていた。教員となって、浅薄ではあるが「ヒロシマ」の知識と思いは他の地方出身の仲間より勝っていた。だが、ただそれだけだった。36年間私は眠っていたのだ。「絵で読む広島」の原爆との出会いが目覚まさせた。広島に生まれ育った者が教師となった時、何を伝えていくべきか、やっと思覚めたのだ。現在、校長となつて4年目、夏休み前の全校講話の話題は毎年「8・9・8・6・8・15」の三つの日付についてである。「8時15分」に出合った今年、特に魂をこめて訴えた。